

ふるさとのお話

あだ 渡船に仇した大蛇



魚道のある最近の富士川

あわ立つ水流。川の中ごろで渡し船はピタリと動かなくなっていました。船頭の顔色はまっ青です。

「皆さん、自分の持物を何か一つ投げ入れて下さい。さあ早く！」

船中の人々は、懐紙や扇子などを川の中に投げ入れました。何と沈んだのは姫の持物ただひとつ。

姫は徳川家康の娘の一人、三河の国竹谷の城主へ嫁ぐ途中の旅でした。

このままでは、富士川の主に船をひっくり返されてしまいます。

身をふるわせる姫とあわてふためく一同を静めて、旗本平松金次郎は「皆の者、姫を無事に頼んだぞ。」

と一言、姫が羽織っていた緋の打掛けを自分がかぶり、大刀を片手に川の中へさんぷと飛び込みました。

なにせ音に聞こえた急流です。その昔、富士川を渡るとは誰もがおそろしく命がけでさえありました。

なぜかといえば、富士川の主に魅入れられたら生けにえにならない限り船はひっくり返されてしまうのです。

その日、水神の森にある渡船場から姫君の一行が船に乗り込みました。



すると不思議、船は動いて、岩渕の岸へ無事着くことができました。

やがて川面がまっ赤に染まりました。波しぶきと共に現われたのは、姫の身代りとなった豪勇の士平松金次郎と大蛇の死がいでした。

今まで渡船に仇してきた富士川の主はこの大蛇だったのです。

それからというもの、渡船が止まるようなことはありませんでした。

市立博物館 展示物 紹介

やま べの あか ひと の 歌 山 部 赤 人 の 歌



田子の浦からみた美しく気高い富士山は、昔から多くの歌や詩にうたわれて来ました。

中でも万葉の歌人山部のあかひと部赤人の歌は、百人一首にも詠まれています。

赤人の歌の拓本

この歌碑は原文のまま書かれ、田子の浦港西の公園内にあります。

田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にぞ 不盡の高嶺に 雪はふりける

「田子の浦とはどこか」という人がいろいろいますが、要するに富士南部の海岸一帯とみてよいでしょう。



田子の浦港西の公園にある石碑

廃棄物（ごみ）をできるだけ再資源化して活用することは、ごみ問題の解決に大いに役立つとともに、資源の海外依存度を低減し、省資源、省エネルギーの促進になります。

その意味から、ムダを省き、資源を大切にし、ごみの再生、再利用をはかりながら、どうしても始末できないごみだけを出すのが、本当の意味の、よい市民生活ではないでしょうか。

——進めよう ごみの減量・資源化——